圖畫と創造

榜する吾人の勤勞教育に於ては何科の教授の場合に於ても宛も言語文字が一般共通して使用せらるる如く圖畫も亦同樣に活用せしめなければならぬ、就中、手工科とは特に堅き握手を以て進まなければならぬのである。勿論圖畫教育の目的の中には美的陶冶と云ふことが重要なる要素として含まれて居る、殊に歐米に於ける輓近の美育運動は一層此の美的要素の發揮を鼓吹し來つたので吾人は此の要求を以て固より正當なるものと認めなければならぬ、然れども獨り圖畫に限らず凡て美そのものゝ本質は縱ひ實用と云ふことより純粹に獨立して居るものとは云へ總て人間の美的生活なるものは必ずや實質的生活の基礎の上に立たなければならぬ、即、全き生活に於ける餘裕の中に投ぜらるゝに非らざれば眞の美と云ふものを味ふことは出來ないものであると思ふ、故に圖畫科に於ける實用的任務と藝術的任務とは兩者共に偏重偏輕す可からざるものなりと雖、亦自ら其の前後する處を誤つてはならぬと思ふ。(圖畫と創造)—宛も亦手工科に於て創作的作品の尊重す可き事を推奬したる如く圖畫に於ても同樣、斯の點に最も深厚なる努力を拂はなければならぬ、是圖畫科の教育的價値をして一層向上せしむる所以である、故に今後の圖畫教授は單なる臨畫に依る模寫的巧妙に滿足することなく、又寫眞術に到底企て及ぶ可くもあらぬ、單なる寫生の奴隷と成ることなく兒童をして其の程度に應じ大に意を錬り工夫を凝らさしめ或は工夫畫に或は圖案に或は理想畫等に彼等の創造的精神を發揮せしめ又手工

技術的要素の尊重

理科其の他の教科に伴ふ諸多の創造的作業に從事する場合に際しても腦中に於ける空なる思考に心力を徒費せしめることなく、必ず之を圖畫に依て構造的に考究せしめ、其の考案の成るや又必ず一旦之を圖畫に依り成案として發表する樣にしたいと思ふ。それから圖畫教授上今一つ力說したいと思ふことは(技術的要素の尊重)—是である。近時小學校に於ける圖畫教授が比較的重要視され來つたに拘らず、遲々として其の進步を見ざる所以は技術的要素の充分なる發揮が出來て居ない處に亦其の一原因の存して居ることは蔽ふ可からざる事實である。是は全く一面教師その人の技術的修練の不充分なると他の一面は小學校の圖畫が自然單なる心理畫に傾き易いとに原因して居ると思ふ、故に圖畫科に於て一面教師その人が自ら技術的修養に努むると共に亦兒童等にも技術的要素の尊重すべきことを自覺せしめ漸次兒童の圖畫をして技術畫と成らしめなければならぬ、譬へば色彩畫の如き何等技術上の順序方法を考究することもなく無法則に只色彩の外見的一致を求めんとするが如きことなく或は塗抹法或は溟暈法或は雲花法とか液骨法とか色彩法の順序方法、色筆の使用法等に關し其の技術的要素の存する處に注意攻究せしめ其他或は位置法とか、輪廓法とか、描寫法とか、遠近法とか、濃淡法とか夫々一定の技術的法則に依らしめ、而して是等の諸要素は獨り傳へ習ふと云ふことにのみ依賴せしめず是等の場合に於ても矢張兒童各自の天禀に應じ夫々自ら相應の個性的獨創的技能を發揮せしむること

亦肝要であると思ふ。

〔九〕實業科

勤勞の基礎的陶冶

〔勤勞の基礎的陶冶〕―こゝに所謂實業科とは農業工業商業等の各科を一括して論述せんが爲に總稱したのである。吾人は勤勞教育に於て彼の作業的性質に富める手工科を特に尊重したると同樣の意義に於て之等實業的諸教科をも重じたいと思ふのである。即ち之に依て必ずしも農丁を作り又は商工徒弟を教養せんとするものではない、若し强いて特殊職業教育を施さんとするは少くとも國民普通教育に於ては、偏頗の見たるを免れないと思ふ。吾人が之等の諸教科に就て採るべきの處は一般的職業的興味の喚起と勤勞の事實的活動の喚起とに在るのである、就中實業科に伴ふ實地作業に依つて勤勞の基礎的陶冶の施さるゝ所に特殊の價値があるのである、即ち眞に心身の骨折りを敢て厭はざるの習慣と實力とを涵養するのである、而かも其の肉體的勤勞の鍛練は軈て精神的勤勞に對しても一種の基礎付けたることを知らなければならぬ、之れ實業科の實施上特に意を用ゆべき要點であると思ふ。

實業心と實業的堪能

〔實業心と實業的堪能〕―實業科は以上述ぶる處の基礎的陶冶に依て、勤勞の實力を培養すると共に亦、之に依て實業心即、生產的興味と實業的堪能とを涵養することを以て主要任務と爲さなければならぬ。思ふに近世文明の社會的一大變革は現在の實社會、實生活をして到底彼の古希臘の如き藝術中心の社會生活を夢想せしむることは出來ない、又中世の如き宗教的隱遁的社會たらしむることは勿論又彼の經濟と實業とを蔑視したる武士的馬上生活を事とするが如きは殆ど思ひもよらぬ空想に屬する事となつたのである、即ち現時代は實に經濟中心の社會とも云ふべく經濟的活動を無視して如何なる人生の事業も最後の成功を期することは出來ないと云ふも過言では無いのである。故に既に屢々說き來りし如く、如何なる教科に於ても經濟的顧慮を與ふるは極めて肝要と爲す所であるが、特に是等實業科は最も適實に其の本旨を發揮すべき位置に在るを以て、出來る丈實習に重きを置き就中技術と經濟との關係に注意し技術的に將又經濟的に實業心を喚起すると共に又其の堪能を養つて行かねばならぬ、而して諸多の智識的要素は實習の間に於て會得し、體得せしむることが肝要である、固より專門教育に非らざる國民普通教育に於て實業に關する夫々の組織的智識を附與せんとするが如きは、過當の望で有つて唯或る程度の實際的活動に依つて基礎陶冶を與ふることを以て本體としなければならぬと思ふ。

〔十〕體操科

體操と勤勞との關係

體操は勤勞の形式的陶冶に屬する教科で有つて體操そのものは固より勤勞ではないが、然れども體操に依て陶冶鍛錬せられたる身體の活動力及びその精神力は凡らゆる勤勞作業に對し陶冶の効果を發揮すべきは説明を要せざる所である、されば此の意味に於て吾人は體操科を尊重し又その教授の實際をして勤勞教育と密接なる關係を保たしめなければならぬと思ふ。勿論體操教育の目的の中には或は身體各部の均齊的發達や健康の保護增進を企るとか或は又特に之を以て志氣を鼓舞し愛國心を喚起するとか之等の要求は總て吾人に於ても充分に之を認めなければならぬ、然れども之等は總て吾人の教育法の最高原理たる勤勞と云ふ形に依て國家社會の爲めに功獻せしめんとする根本主義の中に包含統括されてあるを以て體操科は之に依つて其等の陶冶の効果をして一層堅固ならしむる所以である。要するに獨逸に於ける體操興隆の祖とも云ふべき彼のヤーン氏が考へて居つた樣に國運の進暢を圖らんが爲に精神的にも身體的にも國民の力を强くすると云ふ處に體操科の眞髓は有るのである。

體操科に對する實際の注意

さて體操教授の實際上に關しケルシエンシュタイナー氏はどう云ふ事を云つて居るか、それに耳を傾けつゝ傍ら自分の所見をも敷衍したいと思ふのであるが、氏は先づ體操は毎日二十分間づつ課すべき事を云つて居る、勿論その二十分間を或は二十五分にとか或は三十分にとか云ふが如き錙銖を爭ふの要は無いと思ふが、體操を以て毎日に課して行くと云ふことは寔に肝要なことであると思ふ、然れども尙一歩を進めて體操は勤勞に伴ひ心身自然の必要に應じ一日中幾回にても適度に之を行ふことを主張したいのである、或は算術等に依て特に精神勤勞に心を疲れしめたる場合とか或はある種の作業に從事して久しく身體を屈從したる場合とか或は連日の雨天等に依て何となく心身に惰氣を催したる場合等の如き隨時隨所に於て適度の體操を以てするは本科の効果をして最も適切ならしむる方法であると思ふ。それからケ氏は體操を月曜日と木曜日との兩日は午後に課し其の他の日に於ては午前に課し、而して午前に課する方は主として精神勤勞に於ける心の疲れに對する慰安的均衡を保つを以て目的とするので有つて駈ケツコ遊びとか眞似ごと遊びとか唱歌遊戯等の娯しき遊戯を專とし殊に眞似ごと遊びの如きは兼て教授の際學んだ處の何かの事項に關聯して兒童等自身をして屢々考へ出さしむるがよい、さて又午後に課する方の目的は主として兒童の意志陶冶に資すべく身體の健康發育を保持助長する爲の運動や或は又各種の鍛錬的競爭遊戯の如きを以てする樣に云つて居る、―要するに午前のものを以て娯樂的のものとなし午後のを以て鍛錬的のものと成すと云ふのである、尙體操教授に就きては生理學的解剖學的基礎に關することや又一個の技術としても考へられ教授上彼是攻究すべき問題は多多あるのであるが以上ケ氏の述ぶる處の如き之を併せ考へて實際教授上の考究に資する處が有つたならば體操科の實績を擧ぐる上に於て少なからぬ効果が有ることゝ思ふ。

十一　唱歌科

唱歌と勤労との關係

唱歌それ自身は、固より勤労そのものではないが、唱歌は勤労を美化すると云ふことに於て又必要缺く可からざるものであると思ふ。況して唱歌が諸多の精神的陶冶の効を有することは説明する迄も無きことである、故に唱歌は可成兒童をして暗誦せしめ、事に當り、物に觸れて自然に歌ひ得るに至らしめ、之に依て勤労に服し作業に從事する際に於て、一は以てリズムの快感を與へて其の労苦を忘れしめ、一は以て其の動作に何となく餘裕ありて美化せしむるを得ば、其の身體的に精神的に陶冶の効を奏することは決して尠少でないと思ふ。ケ氏は歌詞歌曲をして直觀教授の内容と聯絡せしむる樣に云つて居るが兎に角兒童の程度に應じ彼等の感興を惹き心身を興奮せしむるに至るものを以てすると云ふことが肝要であると思ふ。

第八　結　論

（勤労教育に依つて如何なる人物を作出すべきか？）

以上全篇を通じて勤労教育なるものゝ意義及其の施設に關し其の要領を縷説した積である。茲に於て吾人は最後に其の結論として是等勤労教育に依て果して如何なる人物が作出さるべきかの問題に到達したのである、何となれば教育は其の如何なる意義、如何なる方法たるに拘らず人物の育成を以て終局の目的と爲し隨て斯の問題は當然の歸着點で有るからである。

然るに勤労教育に關し吾人の既に述べし所は、獨り我邦の現代的立脚地よりのみせず、寧ろ世界の大勢に基く教育の革新としての一般的考察と論述とを試みたもので有つた。然れども愈之を以て實際上の具體的實行を企つるに於ては必ずや其の邦固有の立脚地に於てし、大いに其の邦固有の國家的色彩を以て施されなければならぬ、故に勤労教育なるものが、果して如何なる人物を作り出するに適するかを論ずるに當りては、特に之を本邦の現狀に察し、我邦の教育が如何なる人物を以て標的とせねばならぬかを論述して以て其の問題に答へるのが最も適切であると思ふ。

勿論人格は極て複雜、又國家は極て多樣の人物を要し、到底之を一片の文筆に依て一々指摘せらるる可きものではない、然れども大凡その着目する處に隨ひ概括的に表明すること必ずしも不可能ではな

いと思ふ。

〔一〕 國家と人物

教育は活事實なり

さて我が國家公民教育の理想する人物とは如何、則、吾人が勤勞教育に依て成就せんとする人物は果して如何なる者を其の目標とすべきか、こは極て重要な問題にして決して一家の私見や、單なる自家の考案に依て任意に決定すべきものでない、何となれば國民教育は將來に於ける國家の存立條件である、故に若し夫れ個々の教育者が各自の見解を以て思ひ思ひの教育を施すことを爲さんか、到底第二の國民の思想的社會的分裂を免るゝことは出來ないからである、されば吾人が採るべき教育の大目的は正しく國家の意志と合致すべく而も其の國家の意志の那邊に存するかは國家の法律卽ち教育法令の明示する處に據らなければならぬ。斯く論じ來れば吾人は最早玆に何等考究すべき餘地を有せざるが如きも、元來法律の指示する處は極て普遍的概括的形式的のものにして之を實際教育てふ活事實に施して活事業を實行して初て其の目的は實現せらるゝのである、故に教育者たるものは能く其の國家の意志の存する處を了得し之を實行の上に裁量し各自自家の腦中に具體的の理想を描かなければならぬ、卽ち活事業には活理想を要するのである、吾々實際教育家は須く活躍せる理想に向つて活事實を

實行しなければならぬ、之が爲には現代の我が日本が果して奈何なる人物を要求せるかを最も適實に考察する所がなければならぬ、蓋し教育は時代と共に相移り其時代の國家社會の理想要求と相追隨して離る可からざるものであるからである。

然るに這般の世界大戰は實に人類有史以來の大事件にして隨て其の影響する所も極て浩汎にして且つ深刻なるものがあつた、其の結果は各國共に特に教育の施設に向て深甚の考察を加ふるに至つたのである。就中大戰に依りて國民的精神の益々强固ならん事を最も痛切に感じたると、戰後經濟的國際競走の一層激甚を加へるとに依り、教育の理想を國民的精神と經濟的能力との調合に需めんとする傾向を生じたのは必然の歸趨と云つてよいと思ふ。

既に世界列强の伍伴に加はつた我邦も決して此の大勢から離脱することは出來なかつた、否、世界大戰の影響を受くること意外に深大なものもあり、現時の我國は精神的にも、又、經濟的にも最も戒心を要すべきものがある、我國が今後更に大に飛躍進展すべきか、將又陵夷退轉すべきか正に國民の一大自覺を要するの時、少時も疑懼逡巡姑息を許すべからざるの時代である、隨て特に吾人實際教育家に牢手拔くべからざるの自覺と、勇往邁進の努力とを要すること愈々急にして、徒に煩瑣なる教育の理論や、外國の學說などに悠々憧憬して居るの場合では無いと思ふ、吾人は決して教育の理論研究

を無用視するもので無い、亦外國の新學說を排斥せんとする意をも有しない、然れども是等の研究に依て動かさるゝ思想の爲に、吾人の本領たる實地の教育の根底が常に不安定の地歩に置かるゝの感有るは甚だ痛歎すべきことにして亦深く誡むべき事であると思ふのである、されば吾々實際教育者は、自己の確乎たる信念と理想との下に着々として教育の實際事業を遂行し斯くて其の確乎不動の基礎の上に徐々として理論も研究し、方法も考究して可なることと思ふのである、依つて余は玆に更に再言す。教育者たる各自は各自の心の中に牢手たる理想を据ゑ付けよと。而も勤勞教育の根本精神は我邦の現時代に對し最も確實堅固の理想と方法とを吾人に明示するものなることを信じて疑はないのである。

〔二〕 活人物の資格

今これを本邦現時の時勢に考へ、これを內外の形勢に察して、吾人は果して如何なる人物を以て教育の理想とすべきか、即ち我國現時の國家社會が要求する處の所謂活人物は如何なるものでなければならぬか、如何なる要件を以て資格附けられたるものでなければならぬか、こは實に確乎たる信念と理想の下に有力なる文字に依て表明せらるる有力なる要件でなければならぬ、勿論、細事末節に涉らば其の要件も多々あらんも、玆には最も重要なるものと思爲する四ヶ條を擧げて以て適實なる說明を試みようと思ふ。

1、堅實なる思想と剛健なる精神

如何なる事業も、如何なる文明も、如何なる時代も、如何なる國家も、苟も人間に依て作爲せらるる總てのものは、皆人間の精神の基礎の上に築き建てらるるものであると云ふことは動かすべからざるの眞理である、個人の進歩も、國家社會の發達も、此の精神的基礎を度外視して眞に成就さるるものは無い、而して所謂精神的基礎とは各個人の堅實なる思想と剛健なる精神そのものとを云ふのである、敢て爰に堅實剛健と云ふ、一見して單なる修身的の德目を並べたに過ぎない樣であるが決してさうではない、吾人は之を心理學的にも倫理學的にも充分に說明することが出來るのである、然れども今はたゞ教育の實際の見地から驀直に要點に向つて進みたいと思ふ。

正常と充實

さて余の所謂堅實なる思想とは正常（ノーマル）と充實（フォルヘイト）との二要件を具備するものを云ふ、則ち思想の正常とは其の包有する總ての智識が夫々相當の位置と勢力とを有して均衡を保ち依つて以て全思想界が常に統一されて安固なる狀態に有るを云ふのである、斯くて思想正常なりと雖も其の包藏極めて少量にして精神的內容の甚だしく貧弱なるは亦以て堅實なる精神と爲すに足らず玆に於て充實の要がある、此の

正常と充實の二者を具備して初て堅實なる思想の人と云ふことが出來る、隨て之に反するものを以て不健全なる思想と爲すのである、國家社會は實に此の堅實なる思想の人に依て發達進歩し、不健全なる分子に依て、それが阻止破壞されて行くのである、故に人物陶冶の任に在るものは深く此の點に留意しなければならぬ、今此の堅實なる思想と云ふことを一層明確にならしめんが爲に之と反對せる不健全なる思想とは如何なるものであるかを說かうと思ふ。

不健全思想

さて不健全なる思想を、其の箇々の場合につき、其の總てを擧げんことは、固より難事である。たとひ其の難易に拘らず玆には其の必要を認めない、故に極めて普通な特に兒童敎育上注意を要すべきもののみにつき說かふと思ふのである。吾人は先づ不健全なる思想の一つとして偏狹なる思想を擧げなければならぬ、偏狹なる思想とは或特殊の觀念が常に異常の勢力を有して他の觀念を壓迫又は虐待するが爲に思想の均衡を失したる狀態を云ふのである、かゝる思想の人物は常に衆他の人と調和共同一致することが出來ず、且つ動もすれば突飛な行動を敢てすることがある、面白からざる家庭に育ちたる兒童とか、父母の偏僻性の遺傳を受けて居る兒童とか、心身の一部に缺陷を有せる兒童など最もこれに陷り易き傾向を有するものなれば、かゝる兒童に對しては、つとめて快活の氣風を助長し圓轉豁達の風を涵養する樣特に訓練上注意しなければならぬ。次には空想—偏狹が或る特殊觀念の勢力に

偏狹

空想

因ると異り、こは總ての觀念が各輕浮なる勢力を有して不節制なる働きを爲すを云ふのである。想像力の旺盛なる兒童期の天性は、總ての兒童を驅つて一時これを空中樓閣の中に憧れしむるは、心理自然の傾向である。されど兒童の心意が發達進歩するにつけて、之等不健全なる空想は漸次思想界より排除せられて、漸く着實穩健の域に進むことも亦自然の心理的經程と云はなければならぬ、然れども敎育の方法を誤る時は其の過程を結了せざる間に遂に性格化したる空想的人物を作出することが屢々ある、殊に女子敎育等に於ては最も此の點に注意しなければならぬと思ふ。

遲疑

次ぎには遲疑逡巡—こは前者と殆ど反對にして觀念の何れもが其の勢力甚だ薄弱にして常に明瞭を缺き、事に當り、物に處するに一定の方針を定めてその目的を遂行せんとする統率觀念無く、逡巡姑息遲々として進むなきを云ふのである。天性不活潑なる兒童とか心身の羸弱なる兒童とか又一般に女子に於て之を見るのである。優柔不斷は活世界に立つて行動するものの最も忌むべき處兒童をして常に生々潑々たる有爲の氣象に富ましめんことは訓練上特に緊要なることゝ爲さなければならぬ。第四

破壞

には、破壞思想—なるものがある、不健全思想の中、最も非にして且つ恐るべきもので、破壞思想とは全く或る不調和なる觀念の盲動に基くものにして、心身の調節未だ甚だ完全ならざる兒童等には、其の心理の通則として比較的此の破壞思想に富んで居るものである、仔細に注意觀察すると彼等の素

行の中には破壞的行爲と見做すべきものが頗る多い、故に是等の行爲につきては餘程深き注意を以て監視し、苟も斯る行爲に對しては、極めて嚴に、極めて密に、訓戒し以て全然之を萌芽の中に摘除し未全の中に撲滅せしめなければならぬ。次に吾人は最後に不健全思想の一として厭世觀—を擧げやうと思ふ、厭世觀とは現實の世界を以て、苦痛に勝り、人生を以て、罪惡の充たされたるものと爲し、斯かる世の中に生活するは不愉快之に過ぐるものはなく、寧ろ世の中は無きもがなと萬事を悲觀するものにして其の多くは唯自己の狹隘なる經驗や、偶々自己の遭遇したる不幸失態の運命に對し、奮鬪努力するの勇氣無く、徒に意氣銷沈し、煩悶し、絶望し、悲觀して、我事止みとなし、或は自暴自棄し、或は遂に自殺等の自己破壞の手段に出でゝ、社會の安寧秩序を破ぶる如きを敢てするに至るものにして如斯は社會の發達進歩と全然相容れざるものにして正しく不健全思想として國家社會の大に警戒しなければならぬものである、然るに兒童の心理的特質は、本來樂天的である、單純なる生活の中に天眞爛漫なる活動をなしつゝある彼等には未だ容易に厭世觀を見出すことはない、然れども仔細に各個兒童の個性に注意する時は、往々にして厭世觀の素質を發見することが尠からぬのである、病弱なる兒童とか、面白からざる家庭の事情の下に育つた兒童とか、或は一般に神經質の兒童などに對しては、最も深き注意を要するのである、總て如此兒童に對しては、つとめて活潑有爲の氣象を助成し

快濶にして細事に心を勞せざるの風を涵養する樣特に其の方法を講ぜなければならぬ。

以上は比較的兒童教育上に近接せる立場より不健全思想の一斑を說述したのであるが、之を更に社會一般の上に眼を放ちて觀察する時は、吾人の以て不健全思想と看るべきものは、極て多樣多端にして近時神經衰弱症者の激增せること、精神病患者及精神異狀者の多きこと殊に矯激なる直接行動を爲すものの一層多くなれる等は殆ど近世文明の惡弊的顯象と看るも差支無く、之等は實に思想不健全、精神不確實の著しき徵證であると云はなければならぬ。之が救濟の途として醫術の發達に俟つべきものあり、社會制度の改善に關するものあり、國家政策の方針に委すべきものありて、單純なる議論や方策に依て要領を得て盡さるべきにあらずと雖、而もそが根本的にして且つ確實なる救濟の方法は、結局教育を措きて他に其の方法は無いのである、然れども專ら空虛なる知識を取扱ふことを之れ事とし、又形式的な干涉教育を以て聊かも兒童の自由を許さゞる從來の學習學校が果してこれが救濟の大任に適當するや否やは大なる疑問である、寧ろ現今文明の不健全的傾向は最早其の病痼盲に入れる學習學校の釀成物に非ずやとの感も無き能はず、吾人は之に對し勤勞教育に依て以て消極的に不健全なる分子を防遏芟除すると同時に更に積極的に健全なる要素の發揮及び助長を企てることが出來ると思ふ、併しながら之が爲めには尙更に堅實剛健の精神を構成する要素の中には果して如何なるものが含

有せられて居るかを一層精細に檢覈する所がなければならぬと思ふ。

健實の要素

先づ健全充實の第一要素としては活動—と云ふことが含まれて居ると思ふ。活動の缺乏と云ふことは、どうしても不健全非充實の狀態に在るものと見なければならぬ。活動とは天賦の能力を遺憾なく

活動

發揮することにして個人の發達も、社會の進歩も孜々駸々として絶えざる活動の結果に成るものである、個人も社會も常に新境遇を開拓して絶えず生命を刷新して無窮の進歩の路程に向て進まなければならぬ、されば吾人は教育上に於て兒童の發動的意志を涵養し、大に活潑有爲の氣象を助長することが肝要なることを屢々縷述したのである、自然は人間に與ふるに活動の愉快を以てして居る殊に活動に伴ふ愉快は兒童心理の最も多く認める處にして、此の活動の愉快は兒童をして絶えず盡きざる意志の發展を來たさしめ、窮りなき進歩に向はしむるのである。然るを若し之に反して教師が常に消極的の態度を以て兒童に臨み兒童の活動性を減殺するが如きことあらば、學校は忽ち寂寞枯燥のものと化し、何等愉快もなく何等の希望も無く遂には絶望の境界に沈淪せしめ人生を悲觀する厭世的の素地を心の奥底に作ることゝなるのである。然れども悲哉從來の教育は多くは消極的訓練に流れて居た、勤

强固

勞教育は此の點に付最も活動的の教育といふことが出來るのである。第二には强固—思想と意志の强固、則ち精神の强固と云ふことが無ければならぬ、實に活動は必要なり、人は常に營々として進まね

ばならぬ、されど活動の路程、進行の前途には屢々障碍の有りて横はること、これ物理界に於ても、人事界に於ても免るべからざる處である、若し是等の障碍に逢ひ忽ち挫折するが如きにては何等の事業も目的も達することは出來ない、寧ろ其の障碍に打勝つの力が無ければならぬ、意氣容易に沮喪し些細の障碍にも辟易するが如き者は、吾々は到底有爲の人物と爲すことは出來ない。人生は元來極めて複雜煩瑣なものである、剩へ文明の進歩は愈々益々人生の行路をして多岐多難ならしめて居るのである。此の複雜、煩瑣、多岐、多難の人生場裡に活動すべき人物の資格としては餘程堅固の精神を有しなければならぬ。然るに現時の學校に於て、第二の國民として教育せられつゝある兒童が果して之に適應すべく訓練せられつゝあるか否かは吾人大に疑なきを得ないのである、現今の教育を其の實際に就きて觀るに、吾人は其の中より質實堅固の風を見出すことに於て甚だ乏しい感じがある、隨つて其の兒童の活動振りを見るに所謂線香花火的の表徵が頗る多い、これ其の教育そのものに着實堅固の根底が缺けて居るからである、即ち教育の根底の薄弱が同時に兒童の精神を薄弱に陷らしめつゝある所以である。故に動もすれば其の感情は藁の火の如き、其の意志は麥酒の泡の如きものとなる、吾人は飽迄兒童の心意を練磨薫陶して以て宛も噴火口に花崗石の燃ゆるが如き、將又、練り鍛へられたる鋼鐵の如き感情意志を作成せんことを勉めなければならぬと思ふ。第三はに自制—即ち克己といふこと

が必要である、健實なる心身は固より活動性に富んで居なければならぬと、同時に其の活動たるや强力有勢のものでなければならぬ、然れどもそれが無制限に活動することは亦大に戒しめなければならぬ。身體が健康を損ふ時は、力無き脈搏が頻りに早く鼓動すると同じく、不健實なる精神は節度なく其の意志が働くのである、而も其の意志は薄弱にして多くは何等の成果をも見ることが出來ないものである、畢竟節度なき意志の活動は零碎なる事柄に對して無益に意力を消耗し軈て有益緊要の事に對して全力を注ぐ事が出來ないことゝなるのである、されば大に活動せんとするものは、大に活動を制し得る者でなければならぬ。即ち教育に於て兒童の活動は大に尊ぶ處である、教育は兒童をして常に生々活地に居らしむること極めて緊要である、然れども同時に其の活動は節制ある活動でなければならぬ、是等は教育者が其の兒童に對するに能く緩嚴相持して訓練の正鵠を誤らざる樣深く注意すべき要點であると思ふ、第四には思慮—既に述べし如く活動は必要なり、自制亦必要なり、然れども活動を爲すにも自制を行ふにも通じて必要なるは思慮である、吾人の所謂確乎たる精神の大部分は此の思慮と云ふことの上に建つて居るものが最も多い、人生社會の活動が益々複雜となり劇甚となるにつけて冷靜に思慮を爲すと云ふことが愈々切實に其の必要が感ぜらるゝのである。周圍の騷がしき狀態に我が心を直に搔紊されて、己が立場を失ふ樣にては意志の働きは迚も確實充分なることは出來ぬ、縱しや兒童に向つて胸中閑日月など得て望むべからずとするも、小供らしき繁忙の中に亦小供らしき落付を有せしむることは極めて必要なことであると思ふ、此の點に於て今の教育は餘りに急調子に過ぎて居ると思ふ、活動とは無分別なる早急動作の集合を意味するものでは無い、眞の活動とは意志の選擇、思慮、決定の過程を經たる活動でなければならぬ、教授に於て活動を尊び敏捷を欲するは固より必要である、然れども今の多くの實地教授を見るに、活動を尊び敏捷を欲すること最早其の度を失して教授の質問應答に對する兒童の擧手が殆ど反射的に、器械的に、鐘の響が槌の打擊に應ずるが如き狀あるは果して當を得たるものであるか、兒童の擧手が殆ど反射的器械的なるが故に、會々教師の指名に應じて應答の出來ざるもの其の例甚だ少からず、爾かも教師はそを以て普通有り勝のことゝして轉々指名を轉じて聊かも怪しむ處なし、如斯は最も非難すべき所にして、是等の弊風は今後の教育に於ては根本的に一掃し兒童の精神をして眞に堅固の發動に出づる樣陶冶することが極めて肝要であると思ふ。

以上各項擧げ來り、說き來る處、必ずしも以て盡し得たりと爲すのではない、堅實なる思想、剛健なる精神の解明條件として尙他に緊要看過す可からざるものあるやも知れず、然れども要は唯人格の一點に歸するのである、人間に依て組み立てられたる人生に於て、人間の心意に依つて表現されるも

のである限りは、其の總てに於て吾人は全一なる人格を以て總ての根柢と爲さなければならぬ、紡績製紙、印刷、寫字、交通運搬あらゆるもの皆機械を應用して居る、其他電車あり、汽車汽船あり、自轉車あり、自動車あり、蓄音器あり、活動寫眞あり、飛行機あり、數へ來れば殆ど枚擧に遑あらず、實に現代は機械の時代である、此の驚くべき機械の發明と發達とは先人の夢想だにせざりし神秘不可解の事物を無雜作に創り出し、偉大宏壯の事業をも寸時に成就すること、眞に鬼神をして喫驚瞠若たらしめ、個人の生活をして便利至らしめ、國家社會の內容をして豐富を極めしめて居る、然れども斯る機械は果して何を動力として運轉すべきものであるか、水あり、火あり、蒸氣あり、瓦斯あり、電氣あり則ち之を約すれば自然の力ありて之を運轉して居るのである、而も之を單に自然の力とのみ爲すは甚だしき淺見である、吾人は此の自然力の背後に更に人間と云ふ原動力の在りて之を動かして居る事を決して看却してはならぬのである、今の世には動もすれば斯の原動力を看過し去らんとするの傾向がある、吾人は眞且つ主なる動力は自然の力にあらずして寧ろ之を使用せんとする人心に在ることに着眼せなければならぬ。玆に於て機械の中に人格の必要なることが初めて知らるゝのである、人格を根本動力とせざる機械は實に禍の種である、危險の基である、故に吾人は徹頭徹尾人格を以て本位としなければならぬ、隨つて教育は人格を作ることを以て主眼となさなければならぬのである。

勤勞教育と鍛錬主義

2、鍛錬されたる身體

前項に述ぶる處、堅實なる思想と剛健なる精神とは、實に活人物の根本資格にして、以下說かんとする三要件は、自然前項の中に包含せらるゝ副次的條件とも目すべきものである、而も是を特に摘擧し說述せんとする所以は教育上殊に本邦現時の國民教育上最も痛切に其の緊要を感ぜらるゝからである。

さてこゝに活人物に資格付けらるゝ第二の要件として兒童身體の鍛錬主義を主張とするのである、苟も教育を論ずるものにして體育の必要を說かざるものはない、今殊更に吾人を以て之を贊說するの必要を認めない、然れどもそれが特に鍛錬を主張する者に至つては甚だ尠い、縱し其の主張者の多き少きは兎も角、現今の教育の實際に於て此の鍛錬主義が甚だ實行されて居ないことは爭はれぬ事實である、寧ろ今の教育は軟弱主義に傾いて居る、我が勤勞教育は此の軟弱教育を排斥して大に鍛錬主義を鼓吹するものである、吾人が斯く鍛錬主義を主張するは決して偶然思附たる考案ではない、吾人は之を主張するに心理的生理的、社會的國家的根據を有するものである、是等の根據は吾人をして兒童身體の鍛錬主義に歸着せしめ、これが實行の極めて緊急苟も忽諸に附すべからざるものなることを痛切に感ぜしむるのである。

蓋し身心相關の理法は、今更之を說明せずとも、既に數千年の昔希臘の時代に於て『健全なる精神は健全なる身體に含る』と確言されて居るのである、身體の健康を保持せんとするの希望は苟も生を有するものゝ根本動向にして隨つて之に對する人間の研究は積極的にも將た消極的にも多大の進步を遂げ來つて居る、然れども單に健全と云ふことは身體の正常狀態と調和的發達とを意味し、特に强硬鍛錬の意味を含有することが少い、縱し其の文字的解釋の中には其の意味の包含さるゝとするも、近世教育の實際が確に鍛錬的分子を缺如して居ることは明かな事實である、吾人は固より調和的健全の發達を需むるが、然れども亦同時に錬へられたる身體の中に錬へられたる精神の舍らんことを望んで止まない、故に思想の堅實、精神の剛健を以て主眼とせんとする勤勞教育が、身體の鍛錬を主張するは又必然の要求と云はなければならぬ、筋肉は實に意志の機關なり否身體そのものが卽ち意志の機關である、如何に强固なる意志あるも身體がその機關として之に應ぜざれば能くその實行を見ることは難い、されば眞に實行の人を作らんには平素能く其の筋肉を練磨して何時にても意志の命に應じて敢て辭せざる底の身體を作つて置かなければならぬ。

更に兒童身體の鍛錬を社會的國家的見地よりして考察する時、一層痛切に其の必要を感ぜざるを得ないのである。文明の進步發達は社會の組織をして益々複雜ならしめ、人生の行路をして愈々煩累多からしめたのである、文明の進步は、常に人生を狹き灣流の中より導きて、廣き廣き大洋の上に至らしむるのである、隨つて何時如何なる逆流怒濤の渦中に身を投ずるやも圖られない、斯かる場合に處して果して如何なる者が能く其の覆沒沈溺の厄を免るゝを得るか、云はずもがな、鍛錬錬磨の身體こそ實に此の場合に於ける鋼鉄艦なれ。又更に眼を轉じて列國競爭の狀を視るに、國際的生存競爭の激烈なる、蓋し現時の如く甚だしきものは無いであらう、政治的に經濟的に、將又、人種的に而も其の究局は武力の競爭に歸着するのである、況して我邦は近時世界列强一等國の地位に進み最も激甚なる競爭の尖端に立たなければならぬ狀態と成つて來たので、國民の任務や重く且つ大なりと云はなければならぬ、玆に至つて吾人は愈々兒童身體の鍛錬主義を提げて以て第二の國民を養成しなければならぬと思ふ、ウエリントン公嘗てイートン校に於て兒童の勇壯活潑なる遊戲を見、渭然として嘆じて曰く、ウオトルローの大勝利それ玆に因するかと、吾人は英雄の着眼、常人よりその高きこと數等なるに想ひ至らざるを得ない、世には間々其の身體羸弱にして其の瞻氣豪壯なるものなきにあらず、例へばウキリアム三世の如き、肺を病み咳嗽頻發する每に雙頰殆ど淚痕滴り遂に倫敦の煙に得堪へずしてケンシントンの閑野に屏居せしに拘らず、雙手を以て歐洲の新敎國を統率し、弱齡にして是か盟主となり以てルキ十四世と飽迄拮抗し、蒲柳の質を以て馬上に顧眄し、三軍の士氣を振起したるが如きの

類なきに非ずと雖、要するに是例外の事のみ、普通の道理に於て剛健なる精神は剛健なる身體を俟つて初めて見らるゝのである。

吾人は漫りに外國を尊崇するものに非ず、亦自國を卑下する者にも非ず、若夫れ互に相比較せば、我國民は諸多の點に於て寧ろ優れたる長所を有して居る、而も唯終天の憾みとなす所は我邦人の軀幹矮小なること是である、軀幹の矮小尚忍ぶべし、其の體力の薄弱なるに到りては絶對に忍ぶ能はざる處である、矮小なりとて必ずしも愚に非ず、ナポレオンも體軀小なりき、豐太閤亦矮小なりき、歴山王亦然り、されば小なりとて何も悲觀することはない、然れども體力薄弱なる人種は、最後の戰場、最終の競爭場裡に於て、到底勝利者たるを得ないのである、既往の我邦人は常に成功の位置に立つて以て今日の國勢に迄進んで來たのであるが、將來の邦人が果して能く英國民の如き大成を期し得べきか否か、今にして能く熟慮考究其の施すべきを施し、行ふべきを行はざれば他日噬臍の悔を免かれ得ざるを深く怖るるのである、我國運を堵した日清日露の戰役は幸にして大勝利を以て終結を告げた、世界大戰の渦中にも其の片端は觸れたが之も亦適當に切拔けた、然れども將來の國際競爭は愈々激甚を加へて來た、斯る場合に於て、能く其の久しきに堪へ苦痛を忍び、水を踏み、火を壓して、敢て屈せず、撓まず、愈々久うして愈々雄强なるの勇氣に至りては之を一朝一夕に求むる事は出來ない、其の平常に於て豫て鍛はれてあらねばならぬ、否兒童教育の時期に於て充分に鍛錬して置かねばならぬ、今後の我が國民教育は徒に小悧巧なる人物を作るにあらずして眞に活動力ある人物を作るに在る、貴族的蒲柳才子にあらずして平民的强健者であらねばならぬ、獨り兵士に止らざるなり、商工を爲すにも農業に從事するにも、政治を爲すにも、文學美術に身を委ぬるにも、百般の事業最後の勝敗は實に體力の如何に因て決するのである、如何に自ら大頭人種なりと誇るも、若しそれ體力にして薄弱ならば何を以てか他と拮抗して久しきに堪ふべき、勝敗は花火を散すべき瞬間に決せらるるものに非ずして、只耐久の力あるものが最後の勝利者と成るのである、而して鍛錬せられたるものに非ざれば能く耐久の力を蓄ふる事は出來ない、鍛へよ鍛へ、手腕堅きこと鑄鐵を延べたるが如く、壯顏亦銅の如く、斯くて初て屈强何事にも辟易阻喪せざる第二の國民を作出し得るのである。

鍛錬主義實施上の注意

されば今後の兒童教育に於ては大に鍛錬的要素を尊重することが緊要である、然りと雖之が實行上につきては尚二三の注意を要するものがある、(一)身體の鍛錬の中には必ず精神の鍛錬を意味せざる可からず、——以上論ずる處、主として之を身體的鍛錬の事として述べ來つたのであるが、されど教育の實際に當つては身體の鍛錬は同時に精神の鍛錬でなければならぬ、兩者の訓練陶冶は併行すべきものなることを忘れてはならぬ、これ卽ち教育的鍛錬と非教育鍛錬との異なる所以である、精神的鍛錬

の何等の意味をも有せずして單に身體の鍛錬をのみ行ふは勞働者や力士が身體を鍛ふのと何等選ぶ所は無い、兒童教育は未だ勞働者を作るにも非ず、力士を作るにもあらず、人間を作らんとするのである、故に身體の教育にも精神の教育を忘れてはならぬ、されば兒童を鍛錬する場合には、常に兒童の心意を皷舞、振作して、忍耐、剛毅、敢爲、眞摯等の諸德を涵養し以て精神陶冶の效を收めなければならぬ。(二)鍛錬は生理、衞生の法則と背馳すべからず——鍛錬は大いに必要なり、大いに行はなければならぬ、然れども鍛錬と云ふことは漫に兒童の身體に無理過激のことを行ふの意では無い、必ずや生理衞生の一定の法則に適へる方法でなくてはならぬ、まだ〳〵極めて幼弱な兒童を取扱ふのであるから是等の點には最も留意しなければならぬ、若し然らずして只無法則の鍛錬を行ふ時は其の鍛錬に必ず一つの危險と云ふものが伴ふことゝなる、苟くも危險と云ふことは教育上飽迄避けなければならぬ、勿論兒童をして非衞生的、非生理的の事柄に打勝たしめ、又は此を毫も意に介せざる底の習慣を養ふことも必要である、冬の朝霜おける校庭の屋外體操にも感冒を恐れて躊躇するが如き、會會黄塵萬丈の巷路を通過して早や既に神經を病む樣にては到底鍛錬の施すべき餘地も無い譯である、さればそれが危險の度に達せざる範圍内に於て、且つ能く兒童身體の發達の程度と個性と境遇と場合とに應じて着々として鍛錬の方法を實行することが肝要であると思ふ。(三)鍛錬は亦遞進的にして系統的方法を要す——教育上の事は獨り身體鍛錬に限らず、何事につけても一歩一歩に秩序的に進行しなければならぬは敢て贅言を要せないことであるが、殊に鍛錬の如き若し一歩を誤る時は不測の禍を釀すことなきにあらざれば、能く兒童の身體の現在の實力に鑑み、其の程度に應じつゝ漸次鍛錬の效を積み、依つて以て、高められたる根底を、更に新なる根底として次程の鍛錬を施し、斯くて一段一階能く其の序を追ふて遞進的に進むことが緊要である、躐進は效無くして必ず害あることを知らなければならぬ。

3、剛健の氣象

吾人は更に我が國家社會が要求する活人物の一資格として、大に剛健の風を養はんことを特に皷吹せんとするものである、論者或は云はん、如斯は、一個の修身的德目のみ、是等德目を擧げ來らば、未だ他に指示すべきもの多々あらん、何を殊更に獨り之を問ふの要あらんやと。夫れ然り、若し之を普通の一個の德目として解せば論者の言の如し。然りと雖、吾人は之を社會文明が人間の生理及心理に及ぼす過程を考察し、更に之を歴史的に鑑み依りて以て邦家の將來を考察することに於て之に特殊の意味を發見し、特に之を一主要件と爲したのである。

將來の文明が果して如何なる傾向を以て進み、且つそれが人類の進化變性の上に如何なる結果を來

すかは容易く斷言することは出來ないが、然れども之を過去の文明の過程につき考察し、之を現在の文明の實狀に照して檢覈し、從來の文明なるものが、人間の生理及心理の上に、如何なる影響を及ぼしつゝあるかは明かに認識することが出來ると思ふ、隨つて吾人は之を過去に鑑みて大に將來に資する處がなければならぬと思ふ、抑も文明とは人間が自然を征服し自然を支配することを意味して居る、隨つて文明の進歩は人類が漸次自然的生活の範圍を離脱して益々人爲の境界に進入することゝなるのである、則ち人類は原始の時代より滾々として流れ初めたる文明の中に流れ〳〵て遂に現今の時代に迄進み來つたのである、斯くて人類は愈々文明の下流に立つに至つて愈々自然に遠ざかつて來たのである、人類が益々自然より遠ざかるの結果は、古の素朴なる生活を忘れて益々文明的華奢に陷るのである、此の文明的華奢の生活は果して人類の身心の上に如何なる影響を來しつゝあるか、凡そ文明はあらゆる事物をして、單純より複雜に、粗笨より精妙に、醜汚より純美に進ましむるのである、それが人間の身心の上に及ぼす關係も亦然りである、然るに複雜精妙なるものは單純粗笨なるものに比し自然故障發生の部分と機會とを多からしむ、純美なるものは醜汚なるものに比し著しく汚穢に罹り易いものである、幾千幾萬の歳月の流れ、文明の潮の中に洗錬されたる人類の身心は、愈々精妙、愈々美化、自ら萬物の靈長と稱するを敢て憚らざる迄進化し來つたのであるが、翻つて徐かに思を致せば自然の數理は、大なる長所の反面に大なる短所を以て伏在せしむ、大なる進化の裏には大なる退化の潜めるあるを到底免れしむることが出來ないのである、精妙なる人間の心身が幾多の障碍原因に依つて包圍されつゝあるは事實にして、著しく美化されたる吾人の心身が、著しく羸弱化されつゝあるも事實である、幾多の身體の病、幾多の精神病、是等は皆悉くこれ文明の産物である、佛人ギュイヨー氏は『馬鹿な者は實際上人類の救世主なり』と云へり、吾人は氏の言の極めて意味深長なるを覺ゆるのである、眞に現今の傾向を以て文明の進行に委せば、或は遂に人類の滅亡期に達すること比較的遠きに非ざるを保し難い、人類の滅亡を云々するが如きは餘りに望遠鏡的人生觀に過ぐるとするも、人類史上に於て國家民族の强弱消長榮枯の狀は歴々として見られつゝあるのである、現に佛國の如きは年々人口の增加率著しく減退し、同國の人士は之を人種的自殺（レースイサイド）と稱へて頻りに憂慮しつゝあるが、之が原因を獨り生活難に歸するは甚だしき淺見である、而して斯種の現狀を以て獨り佛國にのみ限るとは爲すも亦近視眼的觀察たるを免れず、こは確かに文明國一般の情勢と見るも差支無い、發展的民族と目せられつゝある獨逸國すら近來頻りに斯種の傾向著しきを傳へて居る、或意味に於て人口過多に苦んでゐる我國の如き果して永く今日の增加率を維持し得べきか、我國の文明は未だ年齒甚だ若い、併しながら何時までも若き年を以て止まることは出來ない、早晩文明の老境に達せなければならぬ、今

にして玆に着眼し適法の策を施す無からんか、世界の競爭場裡に於て遂に敗後を取るべきは必然である、教育は眞に百年の大計で無ければならぬ、吾人は教育を措きて他に根本的方策を求むべきものを知らない、吾人は教育に依つて文明の惡しき傾向に拮抗し又之を排除して國民の生命を無窮に傳へ、邦家の發展を永久に期せなければならぬ、吾人は此が根本策の根本義として大に質實剛健の風を皷吹せんとす、蓋し質實剛健は古代民人の主要なる特徵にして、生活の自然的分子に伴うて表現せらるゝ風格である、民族發展の基礎は實に此の風格の中に存するのである、吾人は未來の文明の理想國に向つて飛躍せんことを努むると同時に古への自然の故鄕を忘れてはならぬ、健全なる將來の人文は常に過去の自然を顧みなければならぬ、古を忘れ自然を離れたる文明は絲を斷れたる紙鳶の如きもの何時落轉の破滅を見るやも料られないのである、もし世に危險なるものがあらば蓋しこれに過ぐるものは無いと思ふ、吾人は教育に依つて此の危險を未發に防がなければならぬ、今後の教育に於て兒童をして大に質朴の生活に慣れしめ努めて剛健の風を助長せしめ以て古代民人の風格を保持留續せしむるは文明に伴ふ副弊を救ふに最も效果あること〻思ふ、實際現今の文明國の兒童ほど或意味に於て憐れなるものは無いと思ふ、人生の激しき生存競爭場裡に疲れ果てたる親の體力に依つて胎內に產み附けられ、生來の弱き體質を以て漸く生長するや、聽て學校教師は限なき多數の知識を彼等の腦中に詰め込まんとして之を校門に迎ふ、兒童は體力不相應の過重の重荷に堪へ兼ねつゝも尙喘々焉として坂路を越えなければならぬ、誰か之を視て以て憫憐の情を催さゞるべき、近世教育學の泰斗ヘルバルト氏は人類の發達と兒童の發達との經程に於て一致點を發見し、之を氏獨特の興味說に配合して教材選擇排列上の開化史的段階說を唱導した、吾人は斯說の中に確かに眞理を認むると共にそれが單に智識啓發の上にのみ考究せられ、且つ其の企てが餘りに人爲的技巧に過ぎて却て失敗に終りたるを惜しむのである、吾人は此の眞理を採つて以て教育の全陶冶の上に應用したいと思ふ、卽ち人類が質朴なる自然生活より現今の文明の生活に迄進み來れる經路に、兒童の生涯を配すれば、兒童期は實に古代期である、卽ち人類の最も質實剛健なる自然生活の時代に相當するのである、吾人はルソーの如く全然兒童を自然に放任せよと迄極言するを好まずと雖も、最も健全なる人格の基礎は兒童の生活をして自然に近からしむることに依りて得らるゝものなるを信じて疑はないのである、斯の點より考察して今の教育は餘りに人爲に過ぎ、今の學校は餘りに文明に馳せて居ると思ふ、質朴！　質朴！　而して剛健の風を助長せよ、特に勤勞生活を以て之を打ち堅めよ、堅實なる人格の基礎はその中に在るのである、國家發展の基礎亦實にこゝに存するのである、神は田舍を作り、人は都會を作ると、而して田舍は勢力の貯藏所にして都會は勢力の消散所である、眞率、忍耐、剛毅、朴訥等の諸德の根幹は主として田

園の間に培はれ、浮華輕噪柔弱等は主として都會を風靡するものである、土壤に接し、草木に觸れて清き太陽の光りに浴しつゝ田園の間に其の幼時を送れる人は大なる幸福である、嘗て土を掘り土壤に戯れ又種子を下したること無き兒童は實に不幸である、田園の自然生活より去りて益々都會の人工的生活に赴かんとするの今日、兒童等をして最も自然的にして且つ精神的滋養物に充ちたる素朴なる古への生活狀態に返さんとする施設を攻究することは實に現今の學校の重大なる任務であると思ふ、而して我が勤勞教育の主旨及びその施設が最も之に該適せるものであることは最早こゝに縷說するの要はないと思ふ。

4、大國民的性格

最後に吾人は今後の我が國家社會が更に活人物の一資格として緊要缺く可からずと爲すものは、大國民的の性格が卽ち是であると思ふ。由來我日本は東洋の一小島國で在つた、然るに此の小島國の上に住する我國民は本來小國民的にして本原的に大國民性の素質を缺如し居つたものと爲すか、吾人は飽迄其の然らざりしを斷言せんとするものである、之れ決して人種的自負心に基くの僻見にあらずして、我大和民族が其の初め確かに大國民的素質を固有し居つた事は、我國上古の神話、文學等に顯はれた思想其の他歷史上の事實に徵して明確に證明することが出來るのである。

夫然り、吾人は吾が民族が其の原始的固有の素質に於て確かに大國民的民族たりし事を斷言して憚らざると同時に、現時の我が國民が爾く大國民として敢て耻づる處なしと公言するに憚り無き能はざるのである。果して然りとせば何故に、又如何なる事情の下に此の固有の國民性が如斯減退したのであるか、吾人は先づ大に其の原因を探究し又更に大いに之を改善するの方策を建てなければならぬと思ふ。扨て之が原因を考究せんとするには吾人は之を地理的に將又歷史的に考察するを以て至當なりと信ず、殊に吾人は其の主因を歷史の中に在りと爲すのである、人或は屢々我國民の島國根性を云々し其の小國民的態度を以て小島國の地理的影響に歸する者ありと雖、吾人は之に反證を擧げて以て却て反對の歸結に至らんとするものである、成程我國が一小島國たるには相違無し、然れども地理の人心に影響を與ふるは獨り風土山川のみ之を恣にするものに非すして同時に海洋の如き亦與て大なる制約の力を有するものである、然るに我國は元來山を越えて山に至るの國にあらず、矗々たる一山を越ゆれば直に豁然として洋々たる大海に臨むは之我國全體の形容である、誰か此の洋々たる大洋に臨む時襟度宏豁、志望遠大、『彼の海越えて?』『彼の海越えて!』の感想無からざらん、此の點より考察して吾人は寧ろ我國の地勢は大國民的性格の發展に該適して餘り有りと思ふのである、現に彼の大英國國民の如き之現代大國民の標本にして而も彼等は實に一小島國民である、等しくこれ小島國民にして

我邦の小國民性の由來

彼は既に大國民として世界の上に飛躍して居るに非らずや、英國民はげに海洋を以て國民的修養の場所と爲したのである、之に反し我國の歴史は就中中世以降の封建制度に於て凡らゆる小國民性を馴致したのである、蓋し封建制度は自然の山河要害に據つて小國域に割據し、互に搏擊反噬を事とし、加ふるに德川氏治政三百年間の鎖國主義は一層其の性を成熟固着せしめたのである、維新の大改革は實に囘天の事業にして百事一新能く今日の國勢を致すを得たと雖、因襲の久しき未だ遽に小國民性を脱却するに至らないのは甚だ遺憾と爲す所である、殊に官尊民卑の風は我國古來よりの弊習にして、維新以後教育の進歩、各種學校の勃興實に驚くに餘ありと雖、能く其の内實を洞觀する時は悉くこれ官吏養成所たるの感無きを得ないのである、これ我國の教育が未だ能く小國民性を淘汰し得ざる所以である、佛國の社會學者ヅモラン氏は英國民が夙に獨立自營の氣象に富み天晴の大國民性を發揮しつゝあるを稱揚すると共に、自國の國民の意氣消沈常に退嬰的なるを歎息し且つ其の主原因を全然佛國教育法の官吏養成主義に在るを指摘して大いに之を痛罵して居るのである、吾人は氏の佛國民に對する言論を單に他山の石として看過することは出來ない、寧ろ之を我國民に移して以て最も該切なる警告であると思ふ。我國の教育は之を官吏養成と言はんより尚一層廣き意味に於て給料取り、即ち月給生活者養成と云ふを以て適當となすのである、上は大學より下は各種專門學校、實業學校乃至小學校の卒業生に至る迄、卒業後獨立自營の事業に依つて規模を擴張せんとするもの果して幾人かある、誠に曉天の星にも譬ふべく滔々たるもの皆官衙の門に入らざれば更に走つて會社其の他私人の事業に雇庸の役に就かんことを需めて止まない、斯くて官祿に食み給料に甘んじて以て屍位閑職に偷安の計を立てんとす、人間至る處青山清水有り、一挺の鍬一口の鎌、携へて以て自己の勤勞を唯一の資本として地球の舞臺に新天地を開拓せんとするの氣慨あるもの果して幾人かある、何ぞ夫れ氣宇の狹き、心膽の小なるや、これ實に我國教育の一大弊所にして吾人が最も速かに一掃しなければならぬ處のものであると思ふ。

以上主として我が國民性に對する歴史的弊習の由來する所を陳述したのであるが、今後吾人の大に陶冶教養せんとする大國民性とは果して如何なるものなるかにつき更に具體的に說明し且つ其の教育上の注意に及びたいと思ふ。

膨脹的國民

〔膨脹的國民〕—大國民てふ概念の中には先づ第一に膨脹的國民と云ふ概念を包含して居ると思ふ、即ち大國民は同時に膨脹的國民でなければならぬのである、然るに膨脹に内的と外的との二義がある、内的膨脹とは子孫の民族的繁殖を云ひ、外的膨脹とは其の繁殖されたる民族の國土的殖民的發展を云ふのである、此の兩樣の發展を實現して初めて眞の膨脹的國民と爲すことが出來る、彼の佛國に於て

年々出産率の減退しつゝあるは顯著なる事實にして統計は最早爭ふべからざる證據を興へ、佛國の一大憂患は實に此の人口問題にして教育家も、道德家も、經濟學者も、政治家も競うて此の大問題を解決せんとして居る、之が原因に就きては諸說紛々たるも同國の社會學者ヅモラン氏は是が主因を結局同國教育の弊に歸して居る、氏は曰く佛蘭西の學制ほど兒童學生の腦漿を絞らるゝものなきは勿論、彼の學校に寄宿する青年の生活は益々その心身を虛弱ならしめ延いて其の子孫をも發育不完全ならしむべく、此の一事は慥に人口減少の有力なる一原因たらずんばあらず、我等は一歩を進めて此の過度の勉强を强ふるに至りし原因を究めざる可からずと。吾人は氏の言を聽き、之を我國の教育の實情に考へて何となく冷汗の脊背に流るゝを覺ゆるのである、幸にして我邦には未だ出產率減退の聲を聽かずと雖、霜を踏んで堅氷に至るとか、思ふに人口減少のこと獨り佛蘭西の地に限りて自然に生ずべき產物には非ざる可し、今にして積極的方策に着眼し置かざれば大勢遂に救ふべからざるに至つて最早如何ともす可からざるに至ることがあるのである、我國の教育が近時益々複雜煩鎖を極め、學科の過重、課事の煩累、幼弱なる兒童にして尙腦漿を絞ること著しく、常に喘々焉として漸く所定の課程に後れざらんことをこれ努めて居る、我國の新教育は尙未だ二十年乃至三十年の經驗をしか有しない、之を絕對に見積るも明治五年の學制發布を起點として僅々五十年にしか過ぎない、之を國家社會の壽命の上より見る時は極めて短小の年月である、隨つて新教育制度の影響が國民の體格上に如何程蓄積的結果を來したかは未だ明確に知ることが出來ない、而も國民體格の向上の聲を聞くこと稀にして寧ろ下向の歎を聽くことの多きを憾みと爲すのである、吾人は現狀の教育方法を繼續することに依つて數十年後の蓄積結果を想像する時、何となく慄然たらざるを得ないのである、吾人は小學校令に明示されたる如く、兒童身體の發達に留意することを以て教育の第一義と爲し、國民道德を堅固にすることを以て其の根底と爲さなければならぬと思ふのであるが、果して今の教育の實際が之等の目的に適へるや否か宜しく大に反省する所がなければならぬと思ふのである。

然れども如何に其の數量に於て子孫繁殖すと雖、それ等が保守退嬰的にして國內にのみ戀着踢蹐して何等積極的進取的發展の見るべきものなければ未だ以て眞の膨脹的民族と爲すことは出來ない、由來愛國の念に强きは我國民の他に卓越したる特色にして益々之を培養し發達せしめなければならぬ、されど我國民の愛國心は動もすれば消極的保守的愛國心に傾き易い性質を持つて居る、一向家鄉に固着し祖國を去り難き念慮に强くして、英國民の如く天涯地角到る處に新殖民地を開拓せんとする樣な積極的愛國心に乏しいのである、是我國從來の教育法が專ら歷史的保守的の愛國心の喚起にのみ重きを置いた結果であると思ふ、勿論我國は萬國に比類無き金甌無缺の國體を有せるを以て特に之を尊重

するは自然の傾向にして亦最も必要なることゝ云はなければならぬが、歴史と地理は密接不離の關係を有し、歴史は專ら保守的性質を帶び、地理は主として進取的傾向を附與するに特效あるものなれば、諸多の教育及び陶冶の上に於て常に此の兩面に注意して保守、進取兩性兼備の愛國心を涵養せんことを努めなければならぬ、斯くて初めて大國民的たる資格の一要素を得らるゝことゝ思ふ。

自營主義

〔自營主義〕—所謂內的發展にせよ、外的發展にせよ、眞に其の發展に依つて大國民的帝國を建設せんには、其の根底として個々の國民に餘程獨立自營の精神が富んで居なければ到底之を能くすることは出來ないと思ふ、既に述べし如く、我國民が封建時代より歴史的に馴致されし小國民性は同時に之を反自營主義卽ち依賴主義と見るも不可無いのである、卽ち彼の官尊民卑、給料生活主義の如き、之れ依賴主義に非ずして何ぞ、されば我國民をして大國民たらしめん爲には先づ我が國民より全然此の依賴主義を取り除きて大に獨立自營の氣象に富ましめなければならぬと思ふ、現今の世界に於て大國民として世界的に發展し列國の欽望を繫げる英國民の如き、彼等の社會の制度に於て、家庭の生活に於て、殊に家庭教育の實際乃至學校教育の方法に於て、故意か自然か兎に角其のあらゆるものに於て獨立自營的精神の涵養に適合して居ると云ふことは、一度英國に遊びたる人の齊しく口を揃へて稱贊する處である、翻つて之を我國の社會狀態特に兒童の家庭生活乃至學校教育の實際に就いて仔細に觀察を下す時は殆ど悉く反對の感じを以て充たさるゝのである。卽ち彼等は、先づ第一に父母に依賴し次いで教師に依賴す、長じて社會に出づるや亦先づ、親讓りの財產に依賴し、舊故知人の引援に依賴し遂に政府の保護に依賴す、斯くて幼兒の時より成人老後に至る迄總じて依賴主義に依つて終始するのである、之れ我が國民的一大通弊にして須らく一掃すべきものである、此の點に就き我國の家庭生活は一大改善を要し、又學校に於ける教授、訓練の方法に於て思ひ切つて革新を加へなければならぬと思ふ、吾人は徒に西洋の個人主義に走らんとするものでは無い、けれども我邦の家族制度に長所のあるが如く、西洋の個人制度にも大いに學ぶべく大いに採るべき長所がある、故に假令それが我國の社會制度に反したる個人主義なればとて我等の國家社會に調和せざる點を捨つると同時に長所迄をも排斥する必要は無い、寧ろ大に彼の長を採りて我の短を補ひ、以て固有の東洋的要素に西洋的要素を加味調和したる理想的社會制度に向ふこそ吾人の正に進むべき方針ならめと思ふ。吾人は今後の兒童教育上大に勤勞主義を鼓吹し依つて以て獨立自營、自奮的精神を養ふ樣にしなければならぬと思ふのである。

民族的同化力

〔民族的同化力〕—獨立自營、膨脹的發展性に富める民族は必ずや地球上の或一角或一地域に於て他民族との接觸を免るゝことは出來ない、種族を異にし人情習慣其の他の固有性に於て亦相等しからざ

る異民族との接觸に當りてや、兩者の調和融合の困難なるは亦免る可からざる自然の傾向にして動もすれば衝突爭鬪をこれ事とするものがある。然れども如斯は確に大國民と目することは出來ない、果して大國民なるものは如何なる異民族も如何なる異地域をも己れに之を包容し之を同化する丈の氣量を有して居なければならぬ、彼のアングロサクソン民族が天涯地角至る處に自家を應化すると同時に着々として異族異域を己れに同化し遂にそれを英國化せざれば止まざるの氣象に至りては眞に吾人の敬慕措く能はざる處である、英人が彼の老大國たる印度を略取するに其の初何等政府に依賴するにあらず聊かも其の兵力、金力を藉るにあらず唯クライブの經營する東印度會社なる單なる一私立會社を以てしたのである、英人が亦彼の大陸濠洲を其の殖民地と爲すや、酷熱なる氣候を凌ぎ、漳泥を冒して巧に黑人を使役し、支那人を利用して、或は開墾に、或は牧畜に、或は汽車を通じ、電線を架し、着々として文明の器物を移し、彼の蠻土をして何時しか開化の地に化して了つた、斯くて遂に太陽の沒すること無してふ程の世界の各地に散有する英國の領土殖民地に於ける英人の爲す處は概ね此の類である、眞に之を大國民と稱せずして何を以てかせん。翻つて我國を顧みるに、我國民性亦必ずしも同化性に乏しとは云はず、儒教の輸入さるるや直に支那の文化を同化し、佛教の傳來するや忽ちに印度の文化を同化した、儒教も佛教も最早原產地のものに非ずして全然日本的のものに成つて了つた、明治維新は亦極めて激漲せる勢を以て歐洲の文明を注入したのであるが遂にそれをも同化して了つた。然れども靜かに思を致すと從來の我邦の同化の經歷は總て受働的にして卽ち居を本國に据え『來るものを』受けて之を國內に同化せしもののみにして、未だ發動發展的に自國の文化を提げて本國外の地に至つて其の土族を同化したるの經驗には甚だ乏しいと云はなければならぬ、唯彼の豆大の臺灣島について僅少なる一經驗を有するのみにして朝鮮に於ける南滿に於けるものは未だ全く之を試驗中と見なければならぬ、吾人は近く此の試驗に及第し更に大なる同化力を養ひて以て大に發展する處の民族とならなければならぬ、最早我國は東洋の一小島國ではない、朝鮮を統轄し滿州を經營しなければならぬ、則ち大陸を支配しなければならぬ地位に立つた、されば餘程强き同化力を有するに非れば能く其の業を全うすることは出來ないのである、抑も同化とは畢竟平和なる征服に外ならぬ、平和なる征服とは宏寬なる大度、恩愛ある感情、强硬なる意志を以て人格的征服を爲すを云ふのである、然るに此の强大な同化力は到底從來の如き空虛な教育法に依つては出來ないと思ふ、之はどうしても我が勤勞教育に依つて徹底的に實力に富んだ訓練陶冶を爲すに非らざれば之を能くすることは出來ないと思ふ。

大國民的品性

〔大國民的品性〕—大國民の資格として細大需め來らば多々あらん、前述各項に說く處唯其の比較的

重要なりと思爲するものにつき述べしに過ぎない、されど最後に今一項而も一層重要なりと思ふ處のものを擧げて說かうと思ふ、卽ち大國民的品性なるものが是である、抑も文化の進步は、人生各個人の生存競爭は勿論列國々際間の生存競爭をして亦愈々激甚ならしめつゝある、而して是等生存競爭は武力を以てすることあり、財力に依ることあり、智力に依ることもある、然れども一步深く之を考察する時は結局人格の競爭に歸着せざるを得ないのである、强固なる國家を組織し列國競爭の間に立つて、益々優勢を占めて發展する民族があらば其處には必ず優秀なる道德があつたと推定しなければならぬ、道德は個人に取つて個人の存續發展の爲に必要なると同時に國家民族に取つても其の國家民族の存續發展の爲めに必要である、卽ち道德ある國家民族は永く榮え、道德の頽廢したる國家民族は遂に衰亡を免るゝことが出來ないのである、一つの國家が一朝一夕の戰爭に敗れて破滅することありとも直に其の滅亡を以て其の戰爭の結果なりと見るは短見である、必ずや其の內部に潛める背德的眞因が存在して居るのである、ポーランドが亡び、印度が亡び、猶太が滅亡したのも皆それである、朝鮮の如き亦然りである、我邦が日淸日露の兩大戰役に勝利を得たのも決して單なる銃劍のみの勝利ではない、矢張我が民族性格及びその國民道德が彼等に優越し又彼等の國民道德に非常な缺陷が有つたからに相違ない、民族性格とは別言すれば國民的品性（フォルクスカラクテル）にして國民道德は卽ち國民的品性の顯現に外ならぬのである、然るに我國の過去は此の點に於て幸に美しき善き歷史を以て飾られて來たのであるが、之を以て將來のことも直ちに善きものとして放任して可いか、吾人は國家の將來を爾く無雜作に速斷することは出來ない、極めて愼重に考究するを要するのである、過去も大切なれど過去は兎に角善も惡も既に過ぎ去つた事であるが、將來は際限が無い、發展も衰亡も共に將來の運命に屬する、將來は利害の懸る處實に迥かに多大にして、將來に對する覺悟及其の態度の適否如何に依て國家の運命は確定せらるゝのである、故に將來の問題は過去の問題よりも深き注意を要する、過去の道德の攻究よりも將來の道德に重きを置かなければならぬ、成程今迄の日本國に於ては從來の儘の民族性格、國民道德で宜かつたに相違無い、それを以て今日迄の國家の地步を占めて來たのである、然れども我が國家が世界列强の間に立つて既に今日の地步を得た以上は、最早今日の日本は昔の日本とは大に境遇が違つて居る、殊に交通機關の發達完備は益々其の境遇の變化を甚しうして來た、昔は各民族各地に別天地を畫して居たが今は宛も一境の個人と個人とが常に近く相逢ふ如く、世界上の國と國とが隣々相接する樣に成つて、經濟上よりも、政治上よりも、道德上よりも、何事につけても國際間のことが甚だ事繁く成つて來た、境遇の變化も實に甚だしいと云はなければならぬ、玆に於て必ずや此の新境遇に應ずる新道德が起らなければならぬと思ふ、此の新境遇に應ずる新道德とは抑も如何なるものである

か、吾人は從來の國民道德を破壞して新なる道德を建設せよと云ふのでは決して無い、矢張我民族固有の國民道德は飽く迄保持尊重し之を根柢として國民的修養と國民的訓練とを施し、以て從來の道德に新なる境遇に應ずるだけの新なる分子を附け加ふる事を爲さうとするに外ならぬのである、然らば其の新修養新訓練とは如何、吾人は之に應ふるに大國民的品性の修養てふ事を以てしようと思ふのである、我が國民が世界列强の間に伍し更に將來世界の舞臺に立つて益々發展して行かうとするには、從來の儘にては何となく氣量が狹い樣に感ぜらるゝ、吾人は大に修養を積んで大國民的の襟度を養ひ禮儀を重んじ博愛の精神に富み、何れの國、何れの處に押し出しても聊かも大國民たるに耻ぢざる底の品性ある國民とならなければならぬ、斯の國民品性の本を務めずして徒に諸他の發展策を論ずるは抑も末である、眞の國家民族の發展は總て此の基礎の上に立たなければならぬ、アングロサクソン人は其の初一小島なりしと雖、其の島上に眞の品性ある一國家を建設した、而して此の品性ある國家を根據として地球の有らゆる方面に向つて發展した、英國の基礎の極めて安固なる所以實にこゝに存するのである、英人は常に何を爲すにも、如何なる處にあつても、己に對しても、人に對してもジェントルマンと云ふことを忘れない、ジェントルマンと云ふ語は英人特有の語にして、之を他國語に譯せんとするも適當の譯字が無い、譯字が無いのみならず數言多語を用ゐるも容易に充分に說明することが出來ない、通例日本語にては之を紳士と譯されあるが、これも完全な譯語で無いと云ふことは屢々學者より聽く處である、中村敬宇先生は彼の有名なる自助論を譯する際に當つて、之に君子と云ふ字を當てられた、或他の學者は士(サムライ)と云ふ語を當てた人もある、兎に角英國の眞意義はジェントルマンに在るジェントルマンと云ふ語の眞意の分らぬ間は英國の眞相を知ることは出來ない、併しながら更に一層深く考察する時はジェントルマンと云ふ語は誠に英人氣質と云ふ美花を咲かしむる、枝たり幹たりではあるが、尙それが根となり土となるものが別にある、これを究むるに非らざれば更に英國の眞髓を穿ち得ることは出來ない、而してそれは實にグレートと云ふ形容詞である、英國人の理想はジェントルマンと云ふ語とグレートと云ふ形容詞とを結合して常にそれに向つて進んで居る、則ち英人は常に偉大と云ふことを理想として居る、等しく品性と云つても、大なる品性もあれば、小なる品性もある、英人の修養を務むる處は此の大なる品性である、英國人が何事を爲すにも彼等が信じて爲したることは即ち彼等が然かするを以てグレートなる事なりと信じたるを以てである、英語のグレート(Great)と云ふ語は獨逸語のグロース(Gross)と云ふ語と同樣である、けれども其の含蓄する處の意味は餘程異つて居る、英國のには今は一種特別の意味を包含して居る、之を漢字に當てゝ偉大と云ひ、日本に當てゝエライと云ふも其の意は近いとも全然一致することは出來ない、故に余はジェン

個人品性と國民品性

トルマン、乃至グレートを總じて之を大國民的品性なる語を以て包括しようとしたのである、抑も品性の陶冶は教育の眼目である、然れども今の教育は個人の品性のみを目的として國民品性と云ふものに未だ其の着眼が及んで居ない、個人に品性がある如く國民品性（フォルクス・カラクテル）なるものがある、而して國民品性は必ずしも個人品性の總和ではない、故に國民教育は兒童各個の個人としての品性陶冶を務むると同時に、將來の國民たらしめんとする國民品性の陶冶と云ふことを逸してはならぬ、吾人は現代の教育に依つて次代の國民品性を一層改進せしめなければならぬ、次代の國民は更に次々代の國民を層一層改進せしめ、斯くて愈々益々遠大に民族改善の目的を達せなければならぬ、これ即ち國民的修養である、明治維新は此の意味に於て我國民の新修養の發起點である、而して今は未だ殆ど其の初程に在ると云ふも差支ないのであるが、今後尚大に修養を積んで大成を期せなければならぬ、吾日本の國民性の狹小なることを以て天爲に歸し吾人努力の僅少を蔽はんとする言譯とする者は宜しく英國を見るがよい、英本國と我日本との地勢と面積とを考へ而して前者を島國根性と云はずして、獨り、我を島國根性と云ふ所以は何處にあるか、我國を以て地勢上島國と云ふならば英國も亦島國なり、自然の感化が力多きものとすれば英國も亦島國根性でなければならぬ、然り、實は其の始め英人も矢張島國根性で有つた、十六世紀ゼームス一世の頃、英蘇兩島合併の時、即ち、シェークスピヤ、ベーコンなどが生れた頃の英人は頻りに調和を缺きて小鬪些爭を事として寔につまらぬ國民で有つた、然るに英人が早くも島國根性を脱し今日の大國民的品性を形成せし所以は何故ぞや、他なし！　シェークスピヤ、ベーコン、ミルトン或はクロムエルの如き思想家或は英傑の士が出でゝ思想上より文學上より將又政治上より或は加ふるに宗教上より國民精神の統一致合を企り、此の調和統一を以て物質的に將又精神的に偉大と云ふことを以て標的として國民的修養を奬め之を大成せしむるに教育を以てしたからである、故に英國の今日あるは決して成る日に成つた譯では無い、英人がグレートブリテンと稱して國の肩書にグレートなる形容詞を冠らしたのは徒に自負誇張心に出たのでは無い、大に意味あることである、我大日本帝國の大の字をして吾人は英人のそれの如く其の文字に其の實を伴はしめ其の意味をして深長ならしめたいのである、其の實を擧げんとならば根本的に心の根底に先づ其の大なるものを据ゑ付けなければならぬ、大なるものとは即ち、大國民的品性そのものである、英人が彼の彈丸黑子の地に住みて未來永劫大陸的天惠を得ざる地位にありながら、死中活を求めて大膽にも而も努め勉めて常に其の理想の偉大と云ふものに向て進んで行つたのは感心の外はない、されど吾人は徒に之を羨んでも何の得る處も無い、須らく大に努勉し我をして斯處に至らしめなければならぬ、吾々、國民教育の任に在るもの宜しく活眼を開きて活事業を實行すべきである、唯に一教室内に於て讀み書

き算用を教ふるのみが能事ではない、全體、教育が精密に進めば進む程、人物を小作りするの傾向が確かにある、これ進歩に伴ふの弊とも云ふべく、今の教育は、實際、盆栽教育てふ諢名を免るゝことが出來ない、此點に關しては實地教育者たる者餘程深き注意を拂はなければ不知不識の間に其弊に陷り易いのである、されば教育者たるものは宜しく先づ自己の氣宇を豁大にして而して其の自己より割出す教授訓練の總ての施設方法をして所謂大國民的性格の陶冶に適せしめんことを心掛くることがどこ迄も肝要であると思ふ。

以上、數項に渉りて縷陳せし處、余が現代の世界、特に日本國と云ふ基底の上に立つて構成したる教育の理想にして同時に現時の我が國家社會が要求しつゝある活人物たるの資格要件なりと思爲する處のものである、然れども此の理想たるや素より吾人の精神と身體とより離れて高く遠く存在するものではないのである、吾人は之を吾人の企つる處の勤勞教育に依りて確實に實現し得るものなることを信じて疑はないと同時に之を從來の因襲的の學習學校に委ぬる事を以て甚だ心細く感ずるものである、凡らゆるものは勤勞を以て得られ、勤勞に依つて築かれ、之を以て實現せられ、之に依つて成功せらる、教育の事業亦之を以て根本主義と爲す可きは素より當然のことであると思ふのである。(終)

昭和四年四月二十五日印刷
昭和四年五月一日發行

精說勤勞教育
(定價金壹圓八拾錢)

著作者　白土千秋　東京市麴町區富士見町五丁目九番地

發行者　辻本經藏　東京市外西巢鴨町六六〇番地

印刷者　矢島力　東京市神田區三崎町三丁目九二番地

製本所　大津湊一

東京市麴町區富士見町五丁目九番地
教育研究會
電話九段七二七番
振替東京五八一八〇番
口座大阪六八八八〇番

著作者檢印

發行所

香柏社印刷所

第五高等學校教授文學士 八波則吉著 教育に安住して 四六判布裝 定價金二圓三十錢 送料金十八錢

東京帝大助教授文學士 入澤宗壽著 國民教育の思潮 四六判布裝 定價金二圓三十錢 送料金十八錢

入澤宗壽 岡崎博共 共著（標案法による） 新地理教育 四六判上製 定價金二圓三十錢 送料金十八錢

東京女子師範學校長文學士 龍山義亮著 教育制度の新潮 四六判背皮 定價金三圓八十錢 送料金十八錢

東大助教授文學士 阿部重孝著 ドルトン案の教育 菊判半紙 定價金五十錢 送料金四錢

入澤宗壽著（標案法による） 山崎博著 學校體育 四六判上製 定價金二圓三十錢 送料金十八錢

東亞協會主任文學士 神代峻通著 社會問題十五講 四六判上製 定價金二圓三十錢 送料金十八錢

レヨベンハウエル原著 木下一雄譯 人間相愛の道德 四六判上製 定價金二圓三十錢 送料金十八錢

九大教授文學士 松濤泰巖著 國民教育講話 菊判上製 定價金一圓 送料金十八錢

文學士 林鎌次郎著 最新歐米教育史 四六判背皮 定價金三圓八十錢 送料金十八錢

文學士 入澤宗壽 山崎博共 共著（標案法による） 新地理教育 四六判上製 定價金二圓三十錢 送料金十八錢

武藏高等學校教授 山本良吉著 新訓練論 四六判上製 定價金一圓 送料金十八錢

東京帝大助教授文學士 阿部重孝著 藝術教育 四六判背皮 定價金三圓三十錢 送料金十八錢

朝鮮帝大教授文學士 松月秀雄著 適性教育 四六判背皮 定價金四圓八十錢 送料金十八錢

文學士 松月秀雄著 個性教育 四六判背皮 定價金二圓五十錢 送料金十八錢

武藏野學院長文學士 菊池俊諦著 感化教育 四六判上製 定價金三圓 送料金十八錢

第一高等學校講師 和田八重造著 家庭科學 四六判上製 定價金三圓 送料金十八錢

東京高師前講師 水木梢著 校長學 四六判上製 定價金二圓三十錢 送料金十八錢

石田利作著 訓導論 四六判上製 定價金一圓八十錢 送料金十八錢

東京帝大講師文學士 上村福幸著 知能測定法 四六判背皮 定價金五圓三十錢 送料金廿七錢

東京帝大研究室文學士 岡部彌太郎著 教育的測定 四六判背皮 定價金四圓 送料金十八錢

京都帝大研究室文學士 高橋俊乘著 日本教育史 四六判 皮 定價金三圓八錢也 送料金十錢

文學士 高木秀一著 個人價値論 四六判 皮 定價金三圓八錢也 送料金十錢

陸軍教授文學士 大村桂巖著 教育學汎論 菊版 布 定價金三圓八錢也 送料金十錢

東京帝大研究室文學士 鶴藤幾太著 實際教育論 四六判 上製 定價金三圓八錢也 送料金十錢

神長樞著 教育的悲劇 四六判 上製 定價金一圓三十錢 送料金十錢

實業補習教育主事 千葉敬止 森茂共著 公民科精義 菊判 上製 定價金三圓五十錢 送料金十錢

醫學士 高峰博著 職業讀本 四六判 上製 定價金壹圓五十錢 送料金十二錢

武藏高等學校教頭 山本良吉著 若い教師へ 菊半判 載 定價金三十五錢 送料金四錢

同 山本良吉著 訓練の四理想 菊半判 載 定價金三十五錢 送料金四錢

佛國 ロアゾー氏原著 三島章道譯 少年團概論 四六判 上製 定價金二圓八錢也 送料金十錢

教育研究會刊行書目

經濟學研究會 三木正一著 經濟學研究 菊判 上製 定價金三圓八錢也 送料金十錢

東京女子大學講師法學士 片山曙著 婦人の法律 四六判 上製 定價金三圓五十錢 送料金十八錢

東京府立第三高女教授文學士 木下一雄著 女子の哲學 四六判 上製 定價金二圓三十錢 送料金十八錢

東京帝大教授文學博士 吉田熊次著 最近教育思潮 四六判 上製 定價金三圓八錢也 送料金十八錢

東京帝大助教授文學士 入澤宗壽著 新教授法原論 四六判 皮 定價金三圓八錢也 送料金十八錢

田制佐重著 教育的社會學 四六判 皮 定價金三圓五十錢 送料金十八錢

五高教授文學士 八波則吉著 讀本中心國語の講習 四六判 上製 定價金三圓八錢也 送料金十八錢

五高教授文學士 八波則吉著 第二國語の講習 四六判 上製 定價金三圓五十錢 送料金十八錢

八波則吉著 第三國語の講習 四六判 上製 定價金貳圓五十錢 送料金十貳錢

東京高師訓導 小林佐源治著 自學中心讀み方教育 上下二冊 定價各三圓也 送料各十八錢

實演修身例話資料

樫葉　勇著

一、二學年用　定價　五、六學年用
三、四學年用　各一・八〇　定價二・五〇　送料各・一八

四箱　六入　判四　六百　號餘　組頁

教育の實際家たる著者が兒童心理の上に立脚して、興味と教訓の兩方面より最も適切なる例話を撰擇し、或は創作して、何人も直ちに實演し得るやう工夫されたもので單なる例話集と其撰を異にする。本書に依つて初めて修身教授の上に新生命を開拓し得といふも決して過言ではあるまい。

新理科教授法

堀尾實善著

體驗主義

定價二〇・〇　送料一二

四三　六百　判十　上餘　製頁

我國理究教授法は、理論及實際共に近時著しく進歩し……教室内より——屋外へ……との叫びは自然物自然現象を對象とする、理科教授に於て必然の趨勢である。本書は理科教授の實際化、即兒童生徒をして實際生活に觸れしめて、理科教授の効果を徹底せしめたいといふ理想のもとに、著者が實際に考案し、研究し、實驗の確證を得て論述されたものである。

學校體操指導の要點

廣島高等師範學校前講師　大林惠美四郎著

現代

定價一・三〇　送料一二

四百　六七　判十　上八　製頁

從來の學校體操に嫌らぬ著者が新體育精神の主張のもとに著された新指導法であつて、七十の圖表を挿んでその方法を明示してゐる。

運動競技法

大林惠美四郎著

定價一・〇〇　送料〇八

四百　六五　判十　上十　製頁

現今の運動競技法を改善してもつと廣く運動競技を行渡らせたいといふ念願から著されたもの、實施法と普及法について委しくかいてある。

教育研究會刊行書目

心理學概要

理學士　文學士　本田親二著

定價一・〇〇　送料〇六

菊百　判五十　上餘　製頁

本書は初めて心理學を學ぶ高等學校專門學校學生の筆記代用教科書としてかゝれたもので上半段には重要事項の筋書を印刷し下半段は筆記用としてあけてある。新しい試みである。文檢受驗者の研究用としても面目いものと考へる。

LOGIC NATURAL SCIENCE

本田親二編（英文）

CBEGHTON HOBSON　全一冊

四各　六一　判二　上〇　製頁

專門學校及大學豫科の英語の教科書として編纂せるもの

定價各一冊金壹圓送料各六錢

算術教授精義

理學士　平田巧著

高一

定價八〇　送料〇八

菊内　判容　横豐　組富

新學期より採用された新制高等小學算術書の精髓であつて一題毎に實際的指導法を示し直に教授の出來るやう平易に解説してある、

教育への思慕

東京女子師範訓導　守屋貫秀著

定價一・八〇　送料一二

四三　六六　判〇　上　製頁

著者の研究論文感想隨筆等を收めたものであつて學校參觀記あり論職あり、眞摯なる研究あり抒情豐なる感想隨筆あり燃ゆるが如き著者の教育愛は至る所に溢れてゐる。

灯を辿りて

肉彈大佐 櫻井忠溫推奬
歩兵少佐 宮崎善助著

定價 一・五〇　送料・一二

四三　六百六十頁　菊判上製

「灯を辿りて」は小説ではあるがある主張がある。暗の中に漂ふ人を明るみへ出さうといふ著者の心持がよく表現されてゐる。また軍事小説的に構成されてゐるが又立派に社會小説として深刻な材料が多分に盛られてゐる。（櫻井大佐序文の中より）誰がよんでも面白い小説。

少年物理學史

理學士 平田巧著

（改訂）

定價 二・五〇　送料・一二

菊判 挿畫 豐富 上製

物理に關する事柄の殆と全部に渡つてゐて教科で教はつたことに肉をつけ血を通はし、必らず讀者を滿足させるに違ひない。また實驗の仕方の工夫や觀察の仕方についても教へられる所が多いであらう。知識慾に目ざめた少年の好讀好資料である。

幼年課外讀本

第五高等學校教授 文學士 八波則吉著

定價・四五　送料・〇六

菊判 挿畫 一〇四頁 圖八十五

學校で教はる正讀本の豫習又は復習に役立ち而も趣味豐かで一度讀みはじめれば面白くてやめられないやうな課學讀本が出來ました。

少年課外讀本

第五高等學校教授 文學士 八波則吉著

定價・七五　送料・〇六

菊判 挿畫 二五五頁 圖七十九

著者はかつて小學國語讀本の編纂に當られた八波先生です。内容の教育的であること製禎の美くしいことさしあの豐富なこと定價の安いこと等内容外觀ともに理想的のものです。

教育研究會刊行書目

入營兵の心得

陸軍歩兵大佐 栗原勇著

定價・五〇　送料・〇四

四六判 並製 凡百頁

新入營者の必讀書として今日まで適切の案内書又心得の知きものは更になし茲に於てか入營兵の便宜の爲めに士官學校前教官栗原大佐は國家の干城たる新入營者の爲めに筆を執られたるもの入營前入營後に必ず心得置く可き事項を滿載せり入營者は勿論父兄諸氏青年團員も必讀すべき良書たり。

青年訓練教程

陸軍歩兵大佐 栗原勇
陸軍歩兵少佐 世良田勝共著

（改訂）

定價・六五　送料・〇四

小型 挿繪 百五十餘頁 洋布製

青年訓練の爲め、兵學著述の權威栗原大佐が軍人畫家として令名ある世良田少佐との共編にして巧妙且眞を穿てる其挿繪圖と通俗に書き綴られたる説明とは讀者をして、全卷立どころに氷解せしむ最好の教科書である。

少年團概論

ロアゾー原著　三島章道譯

定價 二・〇〇　送料・一八

四六判 上製 百六十頁

ボーイスカウト運動は今や世界的のものとなつてきた。本書は少年團日本聯盟副理事長たる三島子がフランスの原著から譯したもので少年團運動の指導者を益する事多大であらう。

少年團訓練法要義

後藤子爵二荒伯爵序
文部省少年團調査委員 奥寺龍溪著

定價 一・五〇　送料・一二

四六判 百六十頁 餘布製

實實剛健なる國民精神の確立に少年團運動が重大な使命を帶びて居ることは云ふまでもない。彼のボーイスカートの創始者バーデン・パウエル將軍の發見された新教育法は必ずや現代教育に對して嫌らない目覺めた教育者に滿足と安心とを與へるであらう。本書は將軍の根本思想、訓練の要旨を詳述し我國少年團の進むべき道を示されたものである。

文部省檢定委員 東京美術學校教授 武藏高等學校教授 鈴川信一 本間良一 共著

中等新圖學

一卷 二卷 三卷 定價金九十、一錢 定價金壹圓廿四錢 定價金六十六錢

送料各金六錢

用器畫は擺擇と排列とは從來の諸書と大に其趣を異にし其教材の何故に國民教課にせねばならぬか」といふ問題を解決し而して「用器畫は形象に關する文明の建設能力を陶冶するものだ」といふ教育意見に基づく著者の研究に據つたものである。

◆全部銅版彫刻を以て製版したるものなれば其美麗と鮮明なること他に比類なし。

法學博士 岡實 著

國民法制要義（全）

▲中學・師範學校用▼ 定價金六十五錢

送料金六錢

立憲治下の國民は何を知られねばならぬかといふ問題を中心とし、法制の基礎觀念として、國家、法、權利の諸現象を說くことは著者が特に苦心された所でありまして、個性意義、團體意識、國家の組織、法の構成等について極めて平易に而かも意義の深い解說がされてあります。

法學博士 岡實 著

國民經濟要義（全）

▲中學・師範學校用▲ 定價金六十一錢

送料金六錢

本書に於ては、經濟の大原則とする理法を解說すると同時に、常にわが國に對する應用如何といふ見地から實際に關れて說かれてあります。

九州帝國大學教授 松濤泰巖 著

女子國民教育學（全）

▲高等女學校教育科用▼ 定價金六十五錢

送料金六錢

本書の編纂に際しては、主に女子が母として家庭に於ける子女教養の道を理解し、以て第二の國民の養成に適切なる素養を得せしめ、次ぎに女子が教師として國民教育に從事する場合に、主として心得べき教育學の初步を會得せしめることを目的とした。

文部省檢定濟中等學校教科書

武藏高等學校教頭 山本良吉 著

新國民作法（全）

▲高等女學校用▼ 定價金四十八錢

送料四錢

洋服のまゝ日本室に入り、日本服のまゝ洋室に入り、奥座敷に導かれることもあればサロンへ案內されることもあり、汽車電車汽船に乘る事もある。かゝる多種多樣式の內にあつて如何なる方法が最もいゝのであるかを親切に指導された、我國最新の作法書である。

武藏高等學校教頭 山本良吉 著

公民教養

▲青年訓練所及補習學校用▼ ▲都市用▼ 上卷、中卷、下卷 各册定價四十錢

送料各四錢

時代は進化する。世界的になつた我國には、時代に順應した文化の教養が公民として必要である。

「電車に乘つて切符を買つたらばありがたうといつて受取る。車掌も金を受取つたらば、同樣にいふ。」

これは本書の一節である。我國古來の美風慣習を入れ歐米の善行を取り、微に入り、細に渉り詳說された國民として必要に常識に必ず一讀すべき良書である。

九州帝國大學教授 長沼賢海 著

新說日本史

▲中學校國史科用▼ 上卷 定價八十三錢 下卷 定價一圓四十四錢

送料上下八十錢

世界に類なき我が國史の成跡 國民道德の淵源及其由來を生徒をして十分に的知せしめ、各自の德操を涵養し延いて益々國家上下の團結を鞏固ならしめん事を期し。

皇祖皇宗の御聖德を始め。世々の忠臣義士の言行の如き史料の確實なるは紙面の許す限り收錄し、國民文化の沿革を知らしむるに力めたる國民教科に體驗を有する著者自信の良教科書である。

文部省補習教育主事 千葉師範學校教諭 森茂 著

公民科要義

▲農村用▼ 上卷 定價金三十八錢 中卷 定價金四十錢 下卷 定價金四十錢

送料各六錢

文部省訓令公民科要綱に基いて森氏十年の研究に依りて成り而も千葉先生の校訂せられし生徒用教科書である如何に適切であるかは玆に蛇足を加ふるの要がない。採用校の多き事他に類なきを見ても如何に良書であるかゞ解る。

エ 3T 51

教育研究會パンフレット

思考の陶冶

山形縣立酒田高等女學校長 神長櫨著

新教育の基礎

菊判 百十餘頁

定價・六五 送料・〇二

著者は本邦に於てドルトン式教育を紹介した最初の人である。今や米國教育界には疾風の如き勢でドルトン式教育が普及しつゝある。本書は該教育法を懇切明快に叙述したものである。

ドルトン案の教育

東京帝國大學助教授 文學士 阿部重孝著

菊判 百十餘頁

定價 送料・〇二

現今の教育界は雜多なる思潮に醉ふて其歸する所を知らず、自學、自由、一切衝動、創造、動的、全人及文藝教育等其眞否に至つては五里霧中なり、本書はそれ等諸説に明快なる批判を加へたるものなり。

新教育思潮批評

文學博士 吉田熊次著

菊判 百十餘頁

定價・五〇 送料・〇二

教育界は雜多なる方法の續出に醉ふて目的論を失つた。目的を失つた人の活動は氣力を失ひ自信を失ひ微底な夫ふ。教育の目的は小學校の問題でない、目的なしに何の教育もできぬ、私は我が社會現代の必要を充たすためにこゝに學校創線の四理想を我が教育界むしろ社會に提出したのである……(序文の一節)

訓練の四理想

武藏高等學校教頭 山本良吉著

菊判 百十七頁

定價・五〇 送料・〇二

胸中に燃え立つ理想をもつて生徒を陶化し、學校を陶化し社會を陶化する、これが教師の始まりであり終りである。

若い教師へ

武藏高等學校教頭 山本良吉著

菊判 九十頁

定價・三五 送料・〇二

教育は職工の仕事でもなければ、實習室の仕事でもない。わが社會をいかに改良すべきかは現時たゞ教師の眞摯な苦心にまたねばならぬ。——(著者)——

終